ふるさと
再発見
広川町郷土史研究会

南北朝時代の郷土　その14

～良成親王、矢部に御在所を構える～

後征西将軍宮、矢部に入る

前号で良成親王（以下、親王と略）が「たけ」の御在所から、宇土（現熊本県宇土市）へ移ったことを述べました。

その後、元中7年（1390年）秋ごろには、さらに八代（現熊本県八代市）に移っています。翌8年12月9日付の五条家文書によって、その年9月に八代の御在所も武家方に攻められ、陥落したことが明らかです。

同年10月7日には、豊後国大友氏の配下である大友親氏や如法寺氏信らが、矢部（現八女市矢部村）へ攻め入っています。一旦は津江方面へ移動した武家方は、妹川（現うきは市妹川）方面から星野村北背の山地に沿って、北川内（現八女市上陽町）に侵入します。この時は牧ノ口（現八女市柳島辺）からも、時を同じく侵入を図っています。これらのことから、9月から10月までの1か月の間に親王が、矢部に入ったと考えられるのです。矢部には五條氏が拠点とした高屋城があり、宮方がこの地を頼ったのも、むべなるかなの気がします。

京都と吉野では、元中9年（1392年）閏10月5日、南朝の後亀山天皇が、北朝の後小松天皇に神器を渡したことで、ここに南北に分かれていた政権が合一します。足かけ57年間続いた南北朝時代の終焉です。

良成親王、南北合一を肯んぜず

この中央での動きに、親王は必ずしも賛同されなかったようで、その最たることは、従前通りに南朝年号を使い続けたことでも、十分にうかがえるのではないでしょうか。

矢部での動静は詳らかではありませんが、最後の書状とされる文書（五条家文書）には別筆で、御在所矢部大杣・御筆元中十二年十月廿日との添え書があります。

この日付までは、親王が大杣御在所に在ったことが証明されるものであり、南朝年号が使用されていたことの証左となります。

この文書以降は、親王の動静についてはぷっつりと途絶えてしまいます。もちろん薨去を示すものでもありません。ちなみに親王の薨去に関しては、元中12年3月10日（三星屋浄蓮諸事手控）とする説もありますが、これだと先に紹介した文書とつじつまが合いません。

『矢部村誌』（平成4年）では、（前略）その後の消息を記したものは見当たらない。したがって、親王の亡くなられた年代や年齢など知ることはできないが、宮の御誕生を正平十六年（一三六一年）頃と推定すると、元中十二年（応永二年、一三九五年）には、三十五歳になっておられたものと思われる。

としています。年齢は問わないとして、矢部周辺での薨去はほぼ間違いないと考えます。

懐良・良成の両親王にとって、この八女が終焉の地となったことだけは確かです。

▲高屋城跡の城山遠望
五條氏が拠点をした城で、良成親王もこの地を頼られた。（八女市矢部村）

広川町古墳資料館だより

現在資料館では、7～8世紀、久泉区の正恵大坪遺跡を展示していますが、その後の町内遺跡も追ってみましょう。9～10世紀の平安時代になると、現在は消滅している堂ヶ平遺跡があります。1952年、広川町東部の赤藪山南麗南斜面の尾根上で、経塚が発見されました。経塚とは、末法思想の影響で極楽往生を願う貴族が経文を容器に入れて土中に埋めたものです。

▲経塚で発見された陶器製と銅製の経筒（広川町史より）

総合クラブひろかわ

「春風ウォーキング」参加者募集

春風を感じながら、白金山からの180度の眺望、満開の桜を楽しみませんか。

■日　時　3月25日㈯、8:30集合
■持参物　保険代100円、飲料水
■申込期限　2月20日㈪

8:30　**ゴットン館北側駐車場**［集合］
（広川町役場から車で約15分）

↓　**白金山**
（標高375メートル）

↓　**薬師堂**
（7月のそうめん流しが有名な場所です）

昼ごろ　**ゴットン水車小屋**［帰着］

※雨天中止。歩きやすい服や靴でお越しください。

問総合クラブひろかわ事務局（生涯学習課生涯学習係内）　☎0943-32-0093

広川文芸

広川短歌会

床の間に松と水仙、万両と卯年のあした静かに向かう　姫野　洋子

老い妻と娘に誘われて嬉野温泉（うれしの）へ新たな思い出刻むひととき　蓮子　住雄

晴れ舞台に大輪の菊鮮やかに幸ある門出を永遠に祝わむ　横山　方子

読み聞かせへ急ぐ早朝（あした）の通学路　一歩一歩の吐く息白し　野中　勝美

蛍火のごとく降りくる今朝の雪もの言ひたげに窓にとどまる　青木佳代子

一年のめぐる速さは年ごとに増して感じる　卯年の始まる　高橋　和子

朝湯いいね　一月三日七時より孫とほっこり「遊心の湯」に　鹿田　恵

開運の神社数多にあるを知る生活のなかのスポットに気づく　結束　節子

初の陽のあふれる庭に日の丸が　幾年ぶりに掲げたりけり　原　千恵子

はつ春のやわらかき陽を窓越しに今年こそはと平穏ねがう　姫野　深幸

ひひらぎに棘あることを疑問にも思はず来たりたがための棘　山下　整子

ふはふはとたのしげに降る白雪も見あぐればよどむ芥のごとし　野中ヨシ子